



ピッポ新聞

2008

9

No.235

年間購読料 (送料込み) 1500円

編集・発行 伊藤俊男

子どもの本専門店

ピッポ

〒424-0886 静岡市清水区草薙1-6-3

TEL & FAX 054-345-5460

URL <http://www.pippo.co.jp>E-mail itoh@pippo.co.jp

しずおか古本市

(仮題)

ピッポ古書クラブご挨拶

新刊の子どもの本屋でありながら、インターネットを通じて、子どもの本を中心に古書の通販を始めたのが5年ほど前。案外、ぼくと古本の相性がよかつたため、5年経つた今も、古本屋のおもしろさの虜になっています。

古書組合にも加盟して、月に一ぺん日本一の古書市場、神田にも出入りして、古書の売り買いにも手を染め、一喜一憂(といっても、失敗ばかりで憂の方が多いのですが)しています。本当は週に一回は市場に出かけたいところなのですが、なにぶん静岡からですから、週一回では経費負けしてしまうのです。

たまには、浜松の市場や、名古屋、神奈川などにも顔を出しますが、ジャンルが子どもの本と限られていますから、思うように古書は入手できません。

そこで、少し発想を転換して、自分の趣味や興味のあるジャンルの一般書も扱ってみようと思いついたので。

市場ばかりでなく、一般の人からも本を積極的に購入することもはじめました。いえね、そんなに大仰なものではないのです。

十月二十九日(水)〜十一月四日(火)
松坂屋静岡店本館7階催事場

ただ、店の前にA4のコピー紙にパソコンで、「本を購入します。特に子どもの本は歓迎です。多い場合にはお宅にもうかがいます」と印刷して、貼り出しただけです。

すると、電話の問い合わせや、店に立ち寄って詳細をきく人がチラホラ出てきました。中には自分の持っている本の自慢だけしていく人もありますがね。「こんなことも古本屋のおもしろさかな」などと思ったりしています。もちろん実際に購入もしました。

と、ここまで書いてきて、いったなにを書きたかつたのかを思い出しました。

十月に松坂屋で開催する古本市にピッポ古書クラブが初参加するから、是非お出でくださいというお願いをしたかつたのです。

古本屋の仲間から古本市にお誘いをいただき、即答で参加の意志を伝えたのです。これまでは、各地の古本市に読者の立場で出かけていきましたが、売り手として、今回は参加です。ぼくは一度これやってみたかつたのです。

目録作りにいま汗を流しています。(汗が出るのはただ蒸し暑いだけです)

十月には目録ができます。希望する方は早めに連絡いただければ、お送りします。

ココでちよつとだけ、今回の出品を紹介しますね。子どもの本が半分、一般書が半分です。子どもの本は福音館の雑誌「かがくのとも」「こどものとも」「たぐさんのふしぎ」「母の友」などたくさん出ます。一般書では、各地の美術館の図録、山やアウトドア関係、近代文学論関係の本を多数出品します。お待ちしております!

ヒアンキの大作『くちばし』 二つの版の謎をとく

第四回

動物学者 今泉吉晴

私は読者、 ヒアンキは敬愛する著者

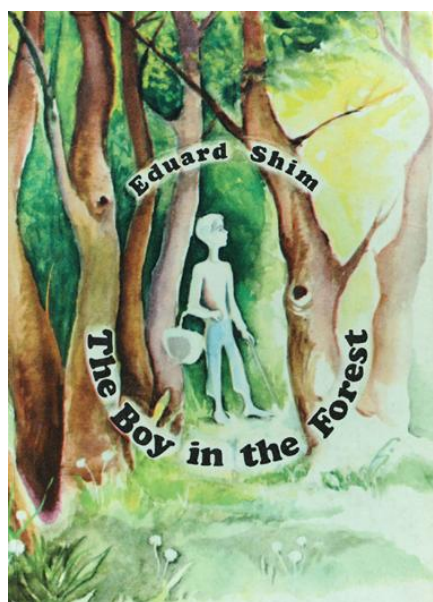
私が『だれのくちばし』が もっといいかの二つの版(簡略版とオリジナル版)の読み比べをする理由は連載の最初に述べたとおりいくつかありますが、簡単にいえば読書の喜びのためです。私にとってこの作品は鳥の動物文学として他に類のない傑作です。

読書の喜びとはゆかいになったり、なるほどと気づかされたり、心をひらかれたり、元気づけられたり、心を打つ何かを得る、ということなのです。

ヴィタリー・ヒアンキ(1894~1959)の若い作家仲間E・シムがいま。シムは『森の少年』という、モグラ猟師を主人公にした作品を書いています(The Boy in the Forest、Eduard Shim、1979、Progress Publishers、Moscow)。モグラ猟師とは聞き慣れない言葉ですが、オオカミ猟師ならご存知でしょ

う。19世紀末のアメリカ西部では、牧場のウシを襲うオオカミを捕らえる猟師が世の注目を集めました。彼らはオオカミ猟師と呼ばれ、西部の英雄でした。

というのは、オオカミは賢く、銃を持つ人を見るとすぐに射程の外に逃げ、毒薬を仕込んだ餌は正体を見破って食べず、ワナはどう隠しても見つけだして、石をけりかけてはじき、かかりませんでした。オオカミの知恵に勝る者だけがオオカミ猟師になれ、多額の懸賞金を手に入れました(『カランポーのオオカミ王口ポ』E・H・シートン、1894、Scribners Magazine、1911)。同じようにモグラの中にも、トンネルに仕掛けられたワナを巧みにかかわす知恵者がいます。



『森の少年』の表紙

留守がちな共働きの両親のもと、小さな猟師が一人バスケケットにモグラの罾などの狩猟道具一式を入れて森を歩いた。The Boy in the Forest、Eduard Shim、1979、Progress Publishers、Moscowより

そこで、モグラ猟師である『森の少年』の主人公はわずか10歳ですが、モグラ塚をみつけるとそつと素手で土をかいて塚の下にあるモグラのトンネルを見つける技を自ら育んでいます。少年は地面にはいつくばり、頬を地面につけるようにしてトンネルの中をのぞき、土の内壁のかすかな痕跡と、トンネルから吹きだす微風の臭いをかぎとつて、よく使われているトンネルを見分けま。そして、トンネルのどちらから獲物がやってくるかを予測し、ワナをかけます。

毎日ワナ線(森の中に点々としかけたワナの巡視路)を見回り、モグラを捕らえたら、毛皮を剥いで広げて乾かし、開拓地(コルホーズ)を訪れる毛皮買い付け人に売ります。少年の夢は毛皮を売ったお金をためて、猟銃を買うことなのです。

私は『森の少年』を読んで感動しました。少年があまり出したモグラ猟の知恵は、私があみ出したモグラ猟のそれと同じで、私もモグラのトンネルをのぞきこみ、土の壁の美しさにほれぼれと見とれたのです。人間は自然と交流すると、美しさを発見し、そこから自然を理解しようとすると思えました。

といったことがあって私は、ロシアの動物文学作家に親しみを持っています。特に作家グループのリーダーであるヒアンキにはシムを含む仲間の理解者という視野の広さと情熱があり、作品をよく理解したいと望んでいます。そしてこの連載を通じて、『だれのくちばし』が もっといいかに二つの版がある謎を解くことが彼の作品の理

解に通じる道、と、気付きました。私が『森の少年』を冒頭で紹介したのは、ロシアの動物文学の多くを英語訳で読めることをお知らせしたいからでもあり、今回は英訳本を活用してみるつもりです。

さて、読み比べは二つの節を残すのみです。第九節「キツツキ」と第十節「結び」がそれです。今回は二つの節を読み比べした後、第一節からふりかえって簡略版とオリジナル版のそれぞれの特徴を見極め、本来のピアンキの作品はどちらといえるかを検討するつもりでしたが、一つお知らせしなければならぬことがあります。

最初の回に、この連載を始める事情を説明し、その中で田中友子氏による私の批評への反論と福音館書店書籍編集部長の「見解」（『ネバーランド』Vol.10、2008年4月）に対する私の再反論は、『ネバーランド』誌に掲載されると書きました。しかしその後、同誌の発行元である「てらいんく社」社長より私の再反論の掲載を断る旨、伝えてきました。

簡単に前後の経緯を書いておきますと、2007年3月に同誌編集長から私は、『ネバーランド』誌9巻に載せる予定で、田中友子氏の新訳『どうくはなくて』の批評の執筆の依頼を受け、原稿を書き上げましたが、4月に9巻掲載は10巻掲載に延期されました。そして2007年10月に至って10巻掲載も断られました。再反論については、今年の4月に私の仲介者から同誌編集長に執筆を申し入れて掲載の約束をとつ

ていたものです。「てらいんく社」社長が掲載拒否を伝えてきた後も同誌編集長からは連絡がありませんが、『ネバーランド』誌の編集権が社長によって侵害された、と思えます。

『ネバーランド』誌による掲載拒否によって、私は田中友子氏の反論に再反論できないばかりか、福音館書店書籍編集部長の「見解」に反論する機会も失いました。私はこの連載も長くなって恐縮なのですが、ピッポ新聞の伊藤さんに引き続き、再反論なども書かせてもらえないか、とお願いし、受諾していただきました。

つまり、この連載は直接の目的としては、『だれのくちばしが もつといいか』の二つの版（簡略版とオリジナル版）の読み比べをしながら、訳文をつくっていくことだったのですが、引き続き、再反論を含めて、先訳の訳文も検討します。

話が前後しましたが、「見解」にかかわる重要な一点を、まずは明らかにしておきます。

「見解」は、福音館書店書籍編集部長米山博久氏の名により、「福音館書店編集部」の見解として書かれています。私は過日、米山氏にお目にかかる機会があり、「見解」は編集部の合意によるものですかと伺いますと、氏は合意の有無に直接答えることはさけ、書籍編集部長としてである意味のことを長々と述べられました。同社の編集権は担当編集部にあり、田中友子氏訳による『くちばし どれが一番りっぱ？』の担当編集部は「科学書編集部」です。「見解」

にある「福音館書店編集部」は存在しません。

このように私の批評を巡って、二つの出版社が担当者をごえ、編集権を無視して判断を出したことは、反論と見解の性格に係しているでしょう。雲をつかむような話になりましたが、以上の再反論等のことはさておき、二つの版を読み進めることにします。

ピアンキの相互扶助論

キツツキの項

第九節「キツツキ」の項にとりかかります。この物語は主人公であるヒタキがさまざまな鳥のすみ場所を訪れて、住人からくちばし自慢を聞く旅ですが、キツツキとの出会いは旅の締めくくりにおかれて、この項の文章もそれにふさわしくヒタキがこれまでの出会いを振り返る構成をとっています。

ピアンキはキツツキがお気に入りだったよう、他にも『斧を持たない匠』など多くの作品に特異なキャラクターとして登場させていますが、この作品でも最後に登場させて、他の鳥とは違うユニークな役割を担わせたというわけです。

この項の二つの版の文章は、前半はほとんど同じです。文章（1）でキツツキ（はじめは名を名乗りません）がヒタキに声をかけて、私のすてきなくちばしをまだ見ていないよ、といいます。続けて、ごらんく

ださい、とくちばしをさしだします(2)。それに對してヒタキは(3)で、「くちばしのどこを見たらいいの？」と聞き返します。つまり、あまり特徴のないくちばしだね、といいます。すでに多くの鳥のくちばしを見て、その形と機能が分かってきたヒタキの言葉です。

じっさい(4)で、その鳥のくちばしの特徴を見ながら、いままで出会った鳥のくちばしをふりかえり、それらと比べて評価を下します。あなたのくちばしは、まっすぐだけどもあまり長くない、といってタシギをはじめとする長くくちばしを持つ鳥たちの名をあげて特徴を回想します。網も袋もついていないし、といってヨタカやペリカンの特徴を思い起こします。これらのヒタキの言葉は、出合いの旅の全体を振り返る総まとめともいえ、読者はヒタキがどのような認識に至ったかを知ります。

そしてヒタキの結論として、文章(5)で「あなたのくちばしではお昼ご飯の食べ物をとるのに手間がかかるし、まして溜めることはできない」といってヨタカとペリカンのくちばしの特徴を基準に、キツツキのくちばしを高くは評価できない、といいます。

前半のここまでの文章は、(5)の「お昼ご飯」の言いあらわし方が違う(オリジナル版では「おひるごはん」であるのに対して、簡略版では「おひるのため」の「たべもの」となっている)だけで、あとは同じです。つまり、どちらの版も内容は同じで、ヒタキはくちばしをたくさん見てきて、見

る目ができた、あなたのくちばしはあまり魅力がない、ちょっと見るだけで十分、といい切りました。

モラルの言葉が流れをつくる

後半は簡略版が一文多く(文章6)、その代わり、他のすべての文章がいくらか切り詰められて、オリジナル版と意味が違ってきます。決定的なのは加えられた一文の影響です。簡略版から見ることにしましょう。

加えられた一文(6)は後半の冒頭にあつて、ヒタキの判断(5)にキツツキが反論する「食物のことばかり考えていてはいけない」という、きつい一言です。

この物語には他に類をみないモラル的な言葉で、この版の刊行(1923年)がロシア革命からまもない食糧難の時期だったことから、編集者か検閲者によって付け加えられた、と思われまふ。

鳥が食物をどのようにして入手しているかをテーマにしている物語であるのに、食物のことばかり考えていてはいけない、というのですから読者には強烈な印象になります。つまり簡略版ではキツツキは、くちばしを食物の獲得とは別のことに使っているといい、それが大切といったことになります。

読者は、食物の獲得とは別のこととはどんなことか、と注意することになって、この言葉が後半の流れをつくりまふ。続く(7)もキツツキの言葉で、いつも

第四回分 オリジナル版訳

第九節 キツツキの項

- (1) たぶん きみは わたしの すてきな くちばしを まだ見ていないんじゃないか。
- (2) ほら よく みて おたのしみください!
- (3) でも くちばしの どこを 楽しんだらいいのかな? と ヒタキが ききかえました。
- (4) いちばんよくある くちばしじゃあないかな。 まっすぐで あまり長なくて あみも ふくるもついていないし。
- (5) そんなくちばしじゃ おひるごはんをとるにも 時間がかかるし ためることなんか できっこないでしょう。
- (6) わたしたち もりの はたらきては だいくしごとや もっこう(木工)しごとのためのの どうぐを ぜんぶ いつもはなさず もっているのさと ツツキハシ キツツキが こたえました。
- (8) このくちばしで きのかわのしたから 食べものを とりだすばかりか 木をつついて ほら(洞)をつくるんだ。

大工道具をもつて森のために働いている、
といます。キツツキの言葉は続き、くち
ばしで食べものを取り出すばかりか、木を
つついて掘り(8)、掘った穴が自分や他
の鳥のすまいになる、といます(9)。
特に他の鳥のためのすまいをつくる、と
いう働きは誰もが納得する大切な役割でしょ
う。「食物のことばかり考えていてはいけ
ない」というキツツキの一言が流れをつく
り、じつさい、他の鳥のためのすまいをつ
くっている、となつて、なるほどいいこと
をしている、と読者はもんくなく理解しま
す。

この項の最後の一文(10)も、キツツキ
の言葉で、「(私のくちばしは)そんなふう
に、やくにたつているのだ」とあつて、
はつきり(文章6)に呼応しています。簡
略版の読者は食物の獲得ではないことにく
ちばしが役立つことが大切、具体的には他
者のための家をたくさんつくっている、と
いう主張をキツツキがした、と受け止める
でしょう。

言葉の喚起力

オリジナル版には(6)の一文がありま
せん。田中友子氏によるとこの版が刊行さ
れたのは1936年のことです。したがつ
てビアンキは遅くともこの時、簡略版の
(6)の文章を削除してオリジナル版をつ
くったことになりました。しかし、私はオリ
ジナル版の原稿はそれよりずっと以前から
用意されていた、おそらく簡略版の刊行

(1923年)より前に用意されていた、
と考えています。

つまり、オリジナル版を何ものが修正
して簡略版をつくり、1923年に刊行し
たのではないかと考えています。そして
簡略版を1936年にビアンキはもとに戻
した、という理解です。なぜそういえるか、
根拠はいろいろありますが、たとえばこの
項の後半のオリジナル版の文章をくり返し
読むと自然に分かつてきます。

オリジナル版の後半の文章は(7)から
始まります。(7)以下の文章はどれも、
簡略版よりほんの少し単語数が多く、その
わずかな言葉によつて、意味が違つていま
す。

まず(7)の文章ですが、簡略版で「大
工仕事や木工仕事の道具を・・・持っ
ている」と、なつている部分が、「大工仕
事や木工仕事の道具を全て・・・持っ
ている」と、「全て」が加わつています。
そのため簡略版では、単に「(私たちはい
つも)道具を・・・持っている」であ
り、読者には道具をいくつ持っているか、
どんな道具をどんな組み合わせでもつてい
るかは分かりません。

そこで読者は、どんな道具が分からない
けれど、とにかく何か道具を持つている、
と思つて読み進むでしょう。つまり、あい
まいでイメージの喚起力の弱い文章です。
それに対してオリジナル版は、「道具を
全て・・・持っている」というのです
から、大変です。読者は全部の道具なんて
持てるはずがない、と思ひ、それなのに全

(9) つついては ほじくりだし ほら
を つくつては じぶんたちや
ほかのとりたちの すまいにして
いるんだよ
(10) わたしの くちばしは・・・
のみ(鑿) なんだよ

第四回分 簡略版訳文

第九節 キツツキの項

- (1) たぶん きみは わたしの すて
きな くちばしを まだ見て い
ないんじゃないか。
- (2) そうだとしたら どうぞ よく
みて おたのしみ ください!
- (3) でも くちばしの どこを見
たらいいのかな? と ヒタキが
ききかえました。
- (4) いちばんよくある くちばじゃ
あないかな。 まっすぐで あま
り長くなくて あみも ふくろも
ついていないし。
- (5) そんな くちばしでは おひる
のための たべものをとるにも
てまがかかるし ためることなん
か できっこないでしょう。

部とはどういふことだろうか、と考えます。つまり、「全て」には読者の想像力を喚起する力があります。

そこで読者は、「大工仕事や木工仕事の道具」とはどんなものがあるだろうか、とも思うでしょう。

つづく(8)と(9)の文章からキツツキは洞を掘って、巣にすると分かるので、人間でいえば家の大柱を作るための大きな道具から、家の中の小さな造作のための小さな道具まで、すべてをいつも持っている、といっていると分かります。

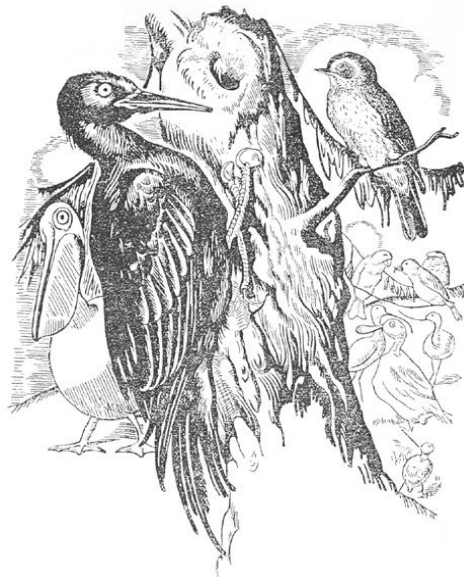
つまり掛合(かけや)から錐(きり)までの家づくりのあらゆる仕事に必要な大きささまざまな道具をもっている、といったこととなります。いうまでもなくキツツキも人間も、そんなにたくさん道具は持ってませんから、読者には大きな疑問として残り、その疑問を解く鍵はないものか、と慎重に読み進みます。

しかし、(9)の文章はもっぱら家づくりの作業の描写で、読者の疑問に直接答えるヒントはありません。ただ、読者は洞をつくるのなら、大きくけずり落として部屋の大柱をつくったり、最後には微妙に広さや高さを調整したりと、いろいろな作業がおこなわれるであろう、と想像できます。そして最後の(10)の文章は、「私のくちばしは……」(鑿(のみ)なんだ」と種明かしします。

読者はなるほど、くちばしが鑿で、その鑿を使った大きささまざまな作業が組み合わされて、すまいが作られている、と理解し

ます。そこでキツツキが「大工仕事や木工仕事の道具の全てを持つている」というのは、鑿(くちばし)一つで、それら人間の道具の全ての働きをしている、という意味だと気付きます。

そこには飛躍があり、一回読んですぐに分かる人は少ないでしょう。私はそれこそ何十回も読むうちに詩のように感じ、(10)の文章の「……」にもつながられて、そうだとひらめきました(私はあいまいな日本語訳をたくさん読んで、訳文にまひしており、長い時間がかかりました)。



簡略版キツツキの挿絵

ヒタキにくちばしの技を見せるキツツキ。背後にヒタキが出会った鳥たちが描き込まれて、旅の終わりが近いことを告げている。P・フリーチキンによる挿絵(1925年)

- (6) ツツキハシ キツツキがいいました。 たべものこと ばかりを かんがえていては だめだよ
- (7) わたしたち もりの はたらきでは だいくしごとやもつこう (木工) しごとの どうぐを いつもはなさず もっているのさ。
- (8) このくちばしで わたしたちは 食べものを とりだすばかりか 木をつついて ほるんだ。
- (9) 木を つついては じぶんたちやほかの とりのための すまいにしているんだよ。
- (10) わたしの のみ(鑿)は そんなふうには やくにたつているのだ!

それならキツツキが全部の道具をいっぺんに、いつも持っている、というのももっともです。キツツキはヒタキに、私のゆちばしは大工仕事や木工仕事の全てに匹敵する仕事をこなしている、と自慢したのです。話が前後しますが、オリジナル版の(8)と(9)の文章の細部を見ておきましょう。どちらも、簡略版の文章よりわずかに二語多いだけですが、はるかに明晰な文章になっています。(8)の文章は前半が食物の捕り方です。簡略版がただ「食べ物をとります」であるのに対して、オリジナル版は「木の皮をつついて下から食べものをとりだす」となっていて、キツツキの食物の入手の仕方、つまり食物である昆虫の幼虫

と木とキツツキの関係が分かります。

ナチュラリストの文章なら、簡略版のよ
うに木の皮を書かないなどということはある
り得ず、ピアンキの推敲が十分なされない
で出版されたとわかります。

(8)の後半と(9)は簡略版が「木を
つついてほる」とあるだけで、何を作るの
かはっきりしないのに対し、オリジナル版
は「木をつついて洞をつくる」とあって、
洞というすまいの空間をつくり出す、と分
かります。

以上のとおり、オリジナル版のキツツキ
の節の後半の文章は、謎かけに始まる、飛
躍のある詩のような文章になっています。
くり返し読むうちにより深く理解できてい
く手応えがあり、よく練られた味わい深い
文章です。

強力かつ繊細、 森の何でも屋さん

私は連載の第二回(7月号、No.233)

で、くちばしの特殊化の問題にふれました。
サクランボの堅い種子を割るシメの大きな
くちばし、まつぼっくりをこじあげるイス
カの十字に交わるくちばし、どちらも特定
の食物を手に入れるのに適した(特殊化し
た)くちばしで、他の用途には向きません。

そこで、タシギが登場して長くて繊細な
くちばしを見せると、沼地ではシメやイス
カの出番はないと分かりました。ところが、
今度は沼地でのくらしに適した特殊化論議
になって、二種類のもっと長くくちばしの

シギが登場し、ついで濾過摂食のハシビロ
ガモの驚異のくちばしへと論争が発展しま
した。そして、ヨタカとペリカンという大
量捕獲の王者の登場となったのです。

そこでキツツキの登場は、タシギによる
揺り戻しをもう一度、呼びもどすもので、
特殊化の争いに終止符を打つ、臨機応変な
くちばしを見せることに意味がありました。

ヒタキはキツツキのくちばしを見て、これ
まで出会った鳥たちのくちばしを思い起こ
し、おさらいをしながら評価してみせまし
た。読者には、ヒタキがくちばしを見る旅
から多くを学んでいた、と分かります。

そのヒタキに、キツツキは自分のくちば
しは、あらゆる大工道具と木工道具を一
にした働きがある、といったのです。キツ
ツキのものの見方は、特殊化したくちばし
で一度にたくさん獲物が捕れればいい、
というのではなく、いろいろなことができ
るくちばしがいい、というもので、特殊化
の袋小路からぬけだす、広い道をさし示し
ています。

キツツキのくちばしは、木をつつく目的
にかなう特殊化して鑿(のみ)になっては
いても、特殊化の程度はヨタカやペリカン
ほど極端ではありません。その代わり長持
ちする精巧なすまいを作るという広い用途
を実現しています。極端な特殊化に魅惑さ
れていたヒタキが、それとは対照的なキツ
ツキのくちばしを見て、こちらもよさそう
と混乱したのも当然です。

ということ、次の最後の節、第十節
「結び」の文章で、「どのくちばしがいい

いか、まだわかりません」ということにな
ります。このヒタキの「まだわかりません」
という言葉は、分かったつもりが、まるで
性格の違う広い用途のくちばしにあって、
それ以前の鳥たちから学んだ特殊化の素晴
らしさへの賞賛が揺らいだ、ということであ
らう。

一芸に秀でた極端な特殊化に対していろ
いろできる機能、応用の広さという対立軸
が示され、ひよっとするとその方が楽しい
し、くらしの本道かもしれない、という揺
らぎです。

一方、簡略版では、特殊化のよさをつか
んだヒタキの前にあらわれたキツツキは他
者の役に立つくちばしを示しました。これ
まではくちばしの機能を見ていたのが、役
に立つ方という異質の評価基準が持ち込ま
れたことになりました。

それなら今まで見てきた鳥にも聞いてみ
ないと分かりません(キツツキがくちばし
で木をつついてすまいをつくるといいますが、
他の鳥もたいはいはくちばしで巣をつ
くっています。その巣は子育てが終われば
放棄され、他の動物が役立つかもしれない
せん)。というわけで、こちらはヒタキが
分からなくなっただけで、こちらはヒタキが
要因が持ち込まれた、ということになりま
す。

以上の検討からキツツキの項は、簡略版
とオリジナル版とで文脈が大きく異なるの
話になっていることが明らかです。簡略版
が文章(6)の「食物のことはかり考えて
いてはいけない」の影響が強く、すまいづ

くりで森の他の鳥たちの役に立っている、という主張だったのに対して、オリジナル版は、すまいづくりの貢献を含みながら、あらゆる大工道具と木工道具に匹敵する多様な仕事をこなすくちばしの素晴らしさの主張になっています。

ということから、私はオリジナル版がピアンキ本来の作品という印象をこの項からも強く印象づけられます。オリジナル版が先という兆候はすでに、他の節の細部の検討で明らかでした。その理由は、簡略版の文章は、ピアンキが書いたにしては欠陥がおおく、あるいは中途半端な表現が多く、ピアンキの文章に他者の手が加えられている、としか考えられないからです。

簡略版は退化型

じつはこの項の簡略版にはオリジナル版がピアンキ本来の作品であることを示す決定的な証拠が記されています。(7)の文章のほとんど全文が必要のないに置かれているのです。この文章の要点は「大工仕事や木工仕事の道具をいつもはなさず持っている」です。

すでに示したとおり、この文章は家づくりに必要な多様な道具を意味します。多様な道具は幅広い作業を意味し、それはオリジナル版では(8)〜(9)の文章と呼応関係にある謎かけであって、(10)の文章がその答えになっていて、なくてはならない文章でした。

ところが簡略版では(6)の文章がその

代わりになって、(8)〜(10)の文章が手直しされて、その問いかけにこたえる形です。(7)の文章はオリジナル版の(7)の文章から「全て」を省いて、謎かけではなくなっています。

それに「大工仕事や木工仕事の道具をいつもはなさず持っている」の必然性がありません。簡略版を読む限りでは「大工仕事や木工仕事の道具」といって、いろいろの道具があることを示唆しても意味がほとんどないからです。

重要な問題なので、簡略版を丁寧に訳した網野菊氏によるキツツキの項の(7)以下の訳文の全文を見ておきましょう(私の訳文と照らし合わせやすいように文章に相当する番号を入れています)。網野氏の訳では、私の訳では「大工仕事や木工仕事の道具」としてある部分が「大工仕事や指物細工用に、道具」と訳されているために、いっそう分かりにくく、読者には不要な部分になっていきます。

「(7) ぼくたち、森の労働者は、大工仕事や指物細工用に、道具を身につけていないけりやいけな。 (8) ぼくたちはその道具で、自分のたべものをかせぐだけでなく、(9) 木もほるんだ。自分のためにも、ほかの鳥のためにも、住居を建てるんだよ。(10) ホラ、ぼくがどんなのみをもっているか!」 『だれのくちばしがすぐれているか?』、1954年、岩波少年文庫、『小ネズミのピーク』に収録)

右の引用部分のうち(7)の「大工仕事や」より(8)の「ぼくたちは」までを省いてしまっても、実質の意味は変わりません。

「(7) ぼくたち、森の労働者は、その道具で、自分のたべものをかせぐだけでなく、(9) 木もほるんだ。自分のためにも、ほかの鳥のためにも、住居を建てるんだよ。(10) ホラ、ぼくがどんなのみをもっているか!」

じつさい、簡略版を訳した田中友子氏による『くちばし どれが一番りっぱ?』では、私が(7)の文章の要点とした部分が省略されています。私が、省略しても同じ、あつてはかえって読者を混乱させると指摘して、じつさい田中友子氏が省略している文章がなぜ簡略版にはあるのか、それは簡略版がオリジナル版を修正してつくられたから、としか考えられません。

では、修正の結果である簡略版はどのような性格の版になっているか、これまで検討してきた全ての項(オリジナル版と同一の文章の項は除く)で、簡略版には説明不足で理解できない箇所が見つかっています。

校閲や校正がきちんと行われた気配がありません。そして、オリジナル版と同一の文章の項には、そのような不具合はないのです。

キツツキの項はオリジナル版が緻密な構成を持っているのに対して、簡略版は軽く、物語の流れから浮いています。今、検討し

た削除した方が読者を混乱させないですむ
と思われる文章は、オリジナル版では重要
な役割をはたしていたのに、簡略版では機
能を失っていました。

つまりはクジラの体内に残る後肢の痕跡
のようなもの、すなわちレリック（痕跡器
官）です。この意味で、簡略版はオリジナ
ル版の退化型、と呼んだらびつたりです。

何でも動物に しゃべらせていいのか

同じ作品に文章が異なる二つの版がある
とは、矛盾です。物語がいよいよクライマッ
クスを迎えようとするキツツキの項で、矛
盾が頂点に達した、といえます。動物に人
間のように話をさせる、という動物文学の
手法がそもそも矛盾であるのに、編集者あ
るいは検閲者が慎重さを欠いた改変をした
ための破綻でもあるはずです。

私は福音館書店科学書編集部編集長から
『くちばし どれが一番りっぱ？』のロシ
ア語原本の書誌をお伺いした際のやりとり
の中で（退職した担当編集者から私への伝
言として）、「ビアンキの娘さん（現在八
十代の方）が『編集者が勝手になおしたこ
ともある』といていた」（引用は原文の
まま。2006年5月26日）と、伝えても
らっています。

K・ローレンツはラドヤード・キプリン
グが、マングーズのリッキティッキタヴィ
を人間のようにしゃべらせていることにふ
れ、「だが、このような様式化は、実際に

動物を知っている人だけに許される」と書
いています（『ソロモンの指環』、ドイツ
語原本は1949年、日本語版は1963
年、日高敏隆訳、早川書房）。

動物物語の中で動物にしゃべらせること
ができるのは、動物を実際に知っている人
だけとは、どういうことでしょうか。

ここでローレンツのいう「動物を実際に
知っている人」とは、研究文献などを読ん
で知った人ではなくて、自分の経験を通し
て知った人という意味でしょう。対象に深
い関心を持ち、愛情をそそぎ、多くの思い
出を持っている人です。すなわちナチュラ
リストであって、私はそのような人は動物
にしゃべらせてよいことを知っているから、
その限りでしゃべらせることができる、と
いう意味と考えます。

そこで、簡略版ではキツツキが（6）で
「食物のことはかり考えてはいけな
い」といいますが、ビアンキの言葉でし
ょうか。

この物語でビアンキは多くの言葉を動物
にしゃべらせていますが、一定の傾向が伺
えます。主人公であるヒタキの言葉をのぞ
くと、多くは登場する鳥の習性を鳥に語ら
せたものです。それも自分のくちばしの形
態的な特徴を具体的にのべて、自慢します。
このような語り口は、鳥が形態で表現して
いることを著者がとらえて言葉にして、鳥
に語らせる動物文学の手法です。自然に密
着したナチュラリストの直接的表現といえ
ます。

ところがキツツキの言葉はくちばしの固
有の特徴とは無関係に、どんな鳥にも適用

できる考え方をいって文脈に合いません。
つまり今までの土俵の範疇を越えてい
て、かみ合いません。

一方、ヒタキは他の鳥をうらやましがり、
もつといいくちばしはないか、と旅をして
います。そこで、「いやになってしまつた」
とか、「素晴らしい」とか、目の前にして
いる事物や困難についての感情をまじえた
感想や判断を多発します。しかし、これも
直接的表現の内といってよいでしょう。ヒ
タキはまた、最終的には、もつともい
くちばしを選ぶ主人公であり、進行役ですが、
発言は必要最小限にさせてあります。

私が気付いたもつとも大胆な言葉（人間
臭い言葉）は、第六節「ハシビロガモ」の
項の文章（4）と（5）で、ハシビロガモ
のくちばしを見たヒタキの一行が「まるで
シャベルじゃないか」と、「ふきだし、わ
らいこらげました」です。

動物の形態を笑つのは人間だけでし
ょう。それを動物にあてはめるのはおかしいと感
じる人もいるはず。私の解釈ではこの
言葉は、読者が奇異だと感じるかもしれな
いことを前もってヒタキの一行に言させた、
ある種の配慮になっています。読者の関心
をハシビロガモのくちばしに向けさせ、な
ぜ、おかしく見えるほど扁平なくちばし
であるかを考えさせる、レトリックです。

実際、ビアンキは続く文章でハシビロガ
モのくちばしが、髭クジラの口に似た濾過
装置をそなえていると明かして、機能にびつ
たりの形態の合理性を明らかにします。つ
まりビアンキは、こっけいに見えるくちば

しが機能美として見えてくる工夫を加えてバランスをとりました。

このように簡略版の「食物のことばかり考えていてはいけない」というキツツキの言葉は、刊行当時の食糧難に対応させて編集者が検閲者が加えた文章の可能性がやはり高いと言わざるを得ません。そして、何より、この言葉は1936年に刊行されたオリジナル版では削除されると共に、キツツキの項は全文にわたって文章が改編されました（元にもどされました）。

さて、今回も一つの項の問題を明らかにするうちに、紙面がつきてきました。再び予告を裏切る結果で大変心苦しいのですが、最後の項は次回にまわし、残りの紙面を使って、この項の検討から明らかにした一文を変えることの重大さに関連する二つの事実を見ておきたいと思えます。

一つは、ビアンキが人の精神を清明にする一言の力をテーマに短編『夜の闇をしのび歩く獣』（Stalking Beasts Of The Night）を書いていく、という事実です。私はこの作品を旧ソ連で英訳されて刊行されたビアンキの作品集『巡り会い』（Chance Meetings, 1950 Foreign Languages Publishing House、Moscow）におさめられた短編で読みました。

この作品集は、ビアンキが10歳の時の磯釣りの経験を書いた短編にはじまり、人生の折々の自然や人との出会いを綴った自伝的な作品を集めたものです。

『夜の闇をしのび歩く獣』の文頭には、ブロークの詩の一行「夜の神秘を明かすみにだす一言の力！」が掲げられています。あらずじはこうです。



『夜の闇を忍び歩く獣』の挿絵

猟師は小丘に立って草原に走り出るウサギを待った。ウサギはあらわれず、暗くなり、想像の世界に遊ぶうちに丘の脇をぬけたオオヤマネコを見逃してしまった。Chance Meetings、1950、Foreign Languages Publishing House、Moscowより、V. クルドフによる挿絵

開拓地の村から遙かに遠い森にウサギ猟にでた熟達の猟師が、夕方になって村にもどる道すがら、目のまえに開けた草原でもう一頭ウサギを捕らえようと猟犬を放します。猟犬に追われたウサギは草原をぐるりと回って逃げる習性があり、猟師は見晴らしのよい小丘に立って、追われてくるウサギを射つ（熟達の猟師には）簡単なものです。

Aまもなくイヌがウサギの足跡を見つけて鳴き声をあげ、追跡がはじまったと分かりました。ところが、いつまで待っても物音一つせず、異様な静けさがあたりを支配しました。

暗くなり、猟師は立っている小丘が古い時代の墓であることを思い起こし、近辺でおきた戦いと戦士の死に思いをはせました。突然、聞いたこともない獣の怪異な鳴き声があがり、猟師は度肝をぬかれます。猟犬の悲鳴のようでしたが、オオカミやクマは絶滅していて、猟師は猟犬を襲う大型獣はいないと思ひ込んでいたのです。

やがて猟犬が地面の足跡をつけながら走ってきて、猟師を見てたちどまり、再び地面の足跡をつけて走り去りました。猟師は衝撃を受けました。猟犬がたどってきたのは謎の大型獣の足跡のはずで、小丘のすぐわきでした。大型獣が近くを通ったのに、知らずにいたのです。

帰途についた猟師は村のはずれでヒツジ飼いから、ヒツジがオオヤマネコに襲われたと聞きます。その一言で猟師は不思議な出来事のすべてを理解しました。

私はビアンキがいう一言がオオヤマネコという自然の存在をさす言葉であって、したがって一言でそのものの性質のすべてを伝え、またそのものと自然との関連のすべてを示唆することができる、直接的な表現であることに注目しています。猟師は、このあたりではオオカミもクマも滅びた、と知っていました。

でも、ほぼ十年周期で増減をくりかえし、増えた年には放浪して大陸を歩きわたる個体が多数いるオオヤマネコなら、近くに出没して当然でした。オオヤマネコという言葉は、そのようなイメージを喚起します。獺師はオオヤマネコという言葉が脳裏にあったなら、戦士の墓から妄想を描いて森を見通す眼力を失いはしなかつたと悔やみ、一言の大切さを心に刻みました。

ビアンキは子ども時代に博物館の陳列室に並ぶ剥製を見て、死体とは信じられず、彼らをよみがえらせる呪文を知りたい、と望んだということです。ビアンキが作品のテーマにまでした一言の大切さは命をよみがえらせる呪文に通じ、『だれのくちばしが もっといいか』にも貫徹されているはずです。

そこでもう一つの事実ですが、私は今回、簡略版のキッツキの項に「食物のことばかり考えてはいけけない」という一文が挿入され、オリジナル版と違う文脈に改変されたことを明らかにしました。

私は今回の議論の締めくくりに、簡略版の日本語版である田中友子氏訳による『くちばし どれが一番りっぱ？』のキッツキの節には、さらにもう一文が訳者によってつけ加えられている事実を指摘しておきます。「ヒタキはばかにしていいました」という一文ですが、以下のような位置に挿入されています（私の訳文と照らし合わせやすいように文章に番号を入れてあります）。

(1) 「ねえ、きみ、きみ、ぼくのくちばしも見てくださいよ。(2) ほーら、うつとりするでしょう？」と、アカゲラがいました。

(3) ヒタキはばかにしていいました。
(4) 「あなたのくちばしなんて、ちつともめずらしくないじゃないの。まがつてないし、長くもなければ、ひげもふくろもない。……」

田中氏は文章(3)のヒタキの言葉、「でもくちばしの どこを見たらいいのかな？」を訳出せず、代わりに「ヒタキはばかにしていいました」という一文を入れました。ヒタキはキッツキのくちばしを見て、すぐには特徴をつかめず、聞き返したのであって、評価は低くても馬鹿にする気はありません。ばかにして、という強い調子にあわせて、続く(4)の文章のニュアンスも変えてあることが明らかです。

田中氏が置き換えた一文は、ローレンツが指摘しているとおり、経験の裏付けのある直接的な表現を離れた一文で、モラル的でもあって、私はヒタキの性格を地に落として、物語の全体に影響している、と感じます。

主役はビアンキの作品であり、翻訳家は原作を日本語の作品として適切に再現することに全力をつくすべきでしょうが、現実には、作品を改変する役を担っているという事実があります。

この項の検討を終えるにあたり二つの対照的な事実をあげましたが、作家と読者を

近づけるヒントになると考えました。

(次号へ続く)

講演とワークショップ

『絵本から知るアイヌ文化』

清水テルサ 6階研修室

十月四日午後1時半～4時半

アイヌ刺繍教室 (講師 宇梶静江さん)

十月五日午後1時半～4時半

「自作の絵本からアイヌ文化を語る」

講師 宇梶静江さん

カムイユーカーラ 弓野恵子さん

会場には宇梶さん制作の絵本の原画の古布絵(古い布へアイヌ刺繍で絵を描いたもの)を展示してご覧いただけます。

両日とも参加費は各600円です。

申し込みとお問い合わせはピッポまで、
電話 0541345-5460

または

Email itoh@pi.ppo.co.jp

宇梶静江さん

1933年北海道浦河郡生まれ。若くして上京、さまざまな社会運動に関わりながら、詩作を続ける。1972年朝日新聞の投書欄に「ウタリ(同胞)よ、手をつなごう」と呼びかけ、大きな反響を呼ぶ。関東圏のアイヌ復権運動の草分けとなり、東京ウタリ会を結成する。1996年アイヌ刺繍を学び、アイヌの精神世界を表現する「古布絵」を編み出す。詩情豊かな表現に満ちた作品は海外でも高く評価され、2004年アイヌ作品コンテストで古布絵作品がアイヌ文化奨励賞受賞。各国先住民との文化交流や国内外での講演活動を行っている。

(GRAPHICATION No157)より

弓野恵子さん

北海道浦河町出身、現在は千葉県在住。不当な差別が多かった北海道を離れ十七歳で上京。結婚し子どもを育てた後、あるアイヌ女性の誘いで、アイヌ刺繍、料理の会にできるようになり、2002年からアイヌ語を学び、2007年にはアイヌ語弁論大会で最優秀賞を受賞。幼い頃の祖母のアイヌ語の語りやイフンケ(子守唄)が蘇り、現在はアイヌ文化に誇りと喜びを感じている。母は、アイヌ文化伝承者の遠山サキさん。各地の講演や刺繍講習などに出かけ、アイヌ文化を伝え、アイヌの復権を願っている。

カムイユカラ

自然の中のカムイが、一人称で語る物語で

す。世界の口承文学の中でも、すばらしい神謡のひとつとして知られています。アイヌ(人間)にとつてカムイ(神)は、全知全能の神ではなく、人間と対等の、とても親しみある存在です。火のカムイ、水のカムイ、大地のカムイなどは、私たちの暮らしの中にいつも共存していますし、生きものたちのカムイ、たとえばシマフクロウのカムイ、クマのカムイなどが物語を語っていきます。アオバトやスズメのカムイも、ユカラの中には登場するのです。言葉の響き、音楽のような語り、口承文学のすばらしさを、ぜひ聴いてください。(さとうち藍さん・解説)

復刊のお知らせ

岩波書店から十月6冊が復刊!

『絵本 ワニのオーケストラ』(ドナルド・エリオット・文 クリントン・アロウウッド・絵 芥川也寸志・石井史子・訳 1785円)

『絵本 カエルのバレエ入門』(ドナルド・エリオット・文 クリントン・アロウウッド・絵 蘆原英了・薄井憲一・訳 1680円)

『片手いっぱい星』(ラフィク・シャミ・作 若林ひとみ・訳 1995円)

『偉大なるM・C』(ヴァジニア・ハミルトン・作 橋本福夫・訳 2310円)
「わたしはありら」

『わたしはアリラ』(ヴァジニア・ハミルトン・作 掛川恭子・訳 2310円)

『雪あらしの町』(ヴァジニア・ハミルトン・作 掛川恭子・訳 2205円)

雑記帳

オリンピックも終わり、これようやくテレビのアナウンサーの絶叫から解放されると思っていたら、なんと福田首相が政権を放棄したことで、今度は自民党総裁選だと、どのチャネルも一斉に総裁候補であふれ出した。お祭り騒ぎを演ずることで、人々を誤魔化して権力を維持しようと、なりふり構わぬ自民党。それに最大限手を貸す、マスメディア。でもな。今度こそ国民は騙されまい!これ希望的観測かな?

緊急のお詫び

ピッポ新聞9月号(つまりこの号)の5頁1段の17行〜2段15行目までの計32行分校正ミスでダブってしまいました。web版は訂正可能でしたが、紙版は既に発送後に気付いたものですから、深くお詫びいたします。次号と一緒に訂正版を送付いたします。